
アボリシオネスト～abolisionist～

妙竹林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アボリシオネスト（abolitionist）

【Nコード】

N4835W

【作者名】

妙竹林

【あらすじ】

差別、偏見、軽蔑。この世には様々な概念が蔓延る。その中に巻き込まれた銀髪の少女は、負の連鎖を断ち切ろうとする黒髪の男が中心となり活動する「奴隷狩り」に出会う。

奴隷として生きた少女。そして黒髪の男。この二人が出会ったのは、一体何の因果か。

プロローグ

一体何処の世界に、概念が服を着て歩く世界があるだろうか。そんなものはないと信じたのに、そこではれっきとした、形無きモノが息をしている。差別だの偏見だの軽蔑だの、そんなものが確かに存在している。ただ存在するだけならまだしも、自らの思想を持ち、考え、自分以外の人間が、ほんの少し髪の色が違い、ほんの少し瞳の色が異なり、ほんの少し金に困っているだけで、人を「奴隷」として扱う。

奴隷売買店の牢屋でただ一点を見つめる、十四歳ほどの、銀髪の少女ラナは、そんな最悪な時代に生まれ、最低な世界に、無茶苦茶に、滅茶苦茶に生かされていた。

そのうえ、何の力も持たない「奴隷」にとって、脅威となりうるものが、多く存在する。

それは、金と権力、そして、魔法。

特に、この魔法と呼ばれる力は、常軌を逸した力を自らの手で行う事ができ、一定の条件、誓約、契約を交わしていれば、誰もが自由自在に扱うことの出来る、最凶の道具。もちろん、自由とはいっても、一定以上の「才能」がない限りは、いかに条件を満たしているようと、魔法を扱うことは不可能。逆を言えば、「才能」があっても、誓約や契約を交わせない環境におかれると、もうどうしようもない。

そして、運よく、これらを持った者達の存在によって、完全に彼女達の生きていくうえでの、人間的な立場は失われていた。こうした力を持つ者に、歯向かう事は出来ない。心身がズタズタになるまで痛めつけられ、助けを呼ぶ気力すらもなくなってしまう。

そんな少女の周りからは毎日、奴隷が買われていく。ラナがそれを眺めていると光を失った眼を此方に向けて、出し尽くしたはずの

涙を流して、助けを求めてくる。でもどうしようもない。力を持たない少女では何も出来ない。今日は六人買われて行った。恐らく今日はこれで店じまいになるだろう。店が閉まると一日一回の食事が出る。今日、この少女達に与えられたのは、たったの芋二つ。

――あら、今日はいつもより少ないのね。

ラナはそんなことを考えながら、手に取った芋を全部均等に半分ずつ分けて皆に配る。この店に居るのは後四人。その全てが女の子供。

――まあ一週間もしたら、また増えるんでしょうけど。

そんなことを考えながら、ラナが芋を口につけようとしたその時、この中で一番小さい子が腹を鳴らした。多分急に胃に食べ物が入ったからだろう。手に持っていた芋は既に無くなっていた。ラナは、自分の持っていた芋をその娘に渡した。その娘は目を見開いて、ラナの差し出した芋と、ラナの顔を交互に見つめている。ラナが微笑むと、その娘は満面の笑みを浮かべ、ラナから芋を受け取り、頬張った。

この生活もう既に六年目。一日くらい食べなくともラナにとってはもう慣れてしまった毎日の習慣である。

――いつ死ぬか分からないのに私が貴重な食料を食べていいはずが無い。ならこの子にあげた方がいいよね。

ラナは芋を頬張る娘を見てそう思った。芋ごときをなんと美味しそうに食べるのだろう。

ラナの生活は、八歳の頃に此処に入れられてから六年間、買われてはまた此処へ売り戻され、また買われては売り戻され、というような繰り返しである。しかし、そんな苦痛な生活をしているのにも関わらず、ラナには全く死ぬ心配がない。ラナの隣では栄養失調で何人もの人が死んで行く。もちろん痩せ細って骨なんかいつでも砕け散ってしまいそうだが、ラナの瞳にはまだ輝きがあった。

――我ながら図太い。出来れば早く死にたいのになあ……。今の今までずっと此処で暮らして来てそれはもう地獄だよ……。でも買わ

れたらそれも地獄……。難しいなあ……。

今更ながら、そう思っただけでラナは冷たい石の床に身を預けた。少しウトウトし始めた頃、もう閉店して、店主が扉を閉めようとしているのに、客がやって来た。見た目がラナより二、三歳年上のその客は、黒くてボサボサだが、それでいて風に靡くとさらさらと流れていく髪の毛に、今みたいな夜でも良く分かる、漆黒の瞳を持つ男であった。男が牢屋に向かってきた。ラナ達が居る牢屋の前で止まると、男はラナの顔をじっと見つめた。

「……ふん」

「……なに？」

ラナは男に向かって問うた。

「綺麗な銀髪だな」

その男の口から出た言葉はラナにとっては、天地がひっくり返るほど予想外のものだった。此処に入ってから六年間、罵倒されることはあっても、褒められた事は無かった。予想外の出来事にラナはおろか、他の三人も動揺を隠せない。

「え……あ、うう……あ、あの、何なんですか……？　あなた誰ですか？」

顔を紅く染め、ラナは客だと分かりきっているのに、相手の正体を尋ねた。すると男は

微かに笑みを浮かべ、こう答えた。

「俺？　俺は今日からお前達のご主人様」

人の出会いというものは、何時、どんな形で現れるか分からない。それが、奴隷と主の間係であろうと。所詮、人の出会いなんて、そんな辺鄙なものなのだ。

何処かの世界の、誰かの願った国の中にある、誰かが大切にしている都市。そこに理不尽が蔓延っていたとしても人は出会う。

この、二人だってそう。

プロローグ（後書き）

お待たせ致しました。

この数ヶ月でかなり趣味も増えました。
特に意味はないです。

これから楽しんでもらえるよう頑張ります。
よろしく願います。

第一話 奴隸狩り

冬の夜は直ぐに暗くなる。今、六時を廻ったばかりなのに、もう既に外の景色は真っ暗だ。そんな中、一人の男が店に入ってきた。

「人には何かしら、必ず苦勞した過去があるはず。更に、その苦勞が大きい小さいだけで人の価値を判断できるわけじゃねえ。大切な事は、今現在がどうであるかということだろう？　ならばそれはこの奴隸達も同じはず……。だってこいつ等は物じゃない。れっきとした者だ。人だ。いくら今が奴隸という結果であろうが、俺が今こいつらを助ければこいつらの今は……人っていう結果になるよな？　そう思わねえ？」

男は牢屋にもたれながら、店の前を、箒で掃いている店主に向かってそう言った。

語りかける口調は低くも無く、高くも無く、それでいて、何処か透き通っているような声だった。

「長い。何訳の分からんことを……。ほら、もう充分見ただろ？」

店じまいだから早く帰ってくんな」

スキンヘッドの頭にバンダナをし、サングラスを掛けている店主はそう言って男をしきりに帰そうとする。

しかし、そんなこともお構いなく、男は続ける。

「まあまあ、そんなこと言わずにさあ、もうちよつといいだろ？」

こいつらだつてずっとこんな所に居て暇なんだろうしさ。ちよつとくらい喋ってやってもいいじゃん」

そう言って男は牢屋の前にしゃがみ込み、ラナに目線を合わせた。

「なあ？　お前らだつて暇だろ？　ちよつとは外の人間と喋りたいよな？」

ラナには否定も肯定も出来ない。そもそも男の言っている事が理解できない。

何処の世界に、奴隸に娯樂を与えてくれる人間が居ようか。奴隸

はこき使われる物。ラナ達はそれを自身の身に刷り込まされ、生きてきた。

罵声を浴び、暴力に訴えられ、恐怖を覚えさせられる。それがこの世界の普通。それがこの世界の道理である。

それなのにこの男は、奴隷を一人の人間として扱った。その事は、ラナの思考をストップさせるには充分すぎた。

「はぁ？ 物好きな奴だな。それより、お前バカか？ 奴隷が人様と喋りたがるわけないだろう！ こいつらは物だぞ？」

店主はそう言って、見せの奥に引っ込みながら、男にこう言った。「まあ、どうせもう店じまいの時間だ。喋りたかったら喋りな。それよりもそいつらに喋れるだけの知識が有るかどうからだな！」

店主は高笑いを上げながら、店の奥へと歩いていった。

店主が引っ込んだのを確認すると、男は再びラナに視線を戻し、ラナと数秒見詰め合った。

ラナの顔が徐々に紅く染まっていく。

——優しい顔……。

ラナは男の顔を見て、そう思った。

切れ長で黒い眼と髪が特徴のその男は、整った顔立ちをしていた。「明日は見えてるか？」

「え？」

男はそう言った。ラナは急な質問に戸惑いを隠せなかった。

「あ、俺の言ってる事分かる？」

「だ、大丈夫です……」

「そう？ よかった。じゃあ続けるぜ？」

男がそう言って、微笑をラナに向けた後、益々顔を紅くしたラナは、勢いに任せたまま頷いた。

「明日を見失ったりしてないか？」

「……」

男の問いに、ラナは黙る事しか出来なかった。明日なんてものはどうに見失っている。ラナが此処に入った八年前。つまり六歳の頃

から、ラナの中に希望はなくなった。

誰も助けてはくれない。なぜなら奴隷とはそういう存在だから。泣いただけで殺されるような時代だから。

「まあ、見えてないわな」

男が続けて言う。

「でもな……」

ラナは男の方を見つめたまま、男の言葉に耳を傾けていた。

「明日なんてものは元々見えないんだよ。だから人は明日に希望を託せるんだ」

ラナには返答の仕様が無い。

確かに、言われてみればその通りだ。だがしかし、だから如何しろというのだろうか。

「……私達は人じゃないよ」

そう答えたラナに、男は悲しげな表情を見せた。

「そっか。……まあいいや。とりあえず、俺はお前達のご主人様になるために此処に来了。ただ……買いに来了わけじゃない」

「なに？ 泥棒さん？」

普段、人と喋る事など全く無いラナであったが、このときばかりは何故か、この男に心のそこから安心感を覚えていた。それ故に、ラナは全然使う機会のなかった、言葉でもスラスラと口にする事が出来た。

「泥棒？ ……うゝん、まあ似たようなもんだな。さて、じゃあ行くか？」

漆黒の男は立ち上がって、檻に手を伸ばした。

この時、ラナは虚しい悲しみを覚えた。こんなにも顔が整っていて爽やかな男が、奴隷を買うならまだしも、無理矢理、奪っていくことに、自分の存在の価値は人ではなく物であると、再認識させられたからだ。

——はあ、お腹空いたな……。

ラナはそんなことを考えながら、どうせ奪われるのだから、抵抗

しない方が痛くないだろうと思い、牢屋から出る為、立ち上がった。
「な、なにをしているんだ貴様っ!？」

するとその時、店主が怒鳴り声を上げた。何事かと思い、ラナは男の方を見上げた。そこには、さっきまでとは違い、男の顔が何故だかよく見えていた。不思議に思いつつ、ラナは次に店主の方を向いた。これもはっきりと見える。一体何が起こったのかと思った時、ラナの隣で女の子が眼を見開いている。

「ど、如何したの？」

ラナが声を上ずらせながら聞いた。

「お、お、檻から……」

――檻から？ 檻が如何したって言うのよ？

ラナはそう思って前に歩みを進めた。しかし、足腰が弱っているためか、ラナは後ろによりけてしまった。ふらふらと、千鳥足で後ろの壁に背中をぶつけると、ゴツゴツしている。ラナが手で壁を押し返そうとすると、手がすり抜けた。それもそのはず、ラナの後ろにあったのは、先ほどまで自分が入っていた、檻だったのだから。ラナはこの出来事に驚いて前に飛び退いた。

すると、勢い余って男にぶつかった。

さらに、一体どれ程混乱していたのか、ラナは男に思いっきり抱きついた。

「ぐえっ……! し、絞まってる! 痛い! 死ぬって!」

「あっ! す、すみません……」

ラナは顔が紅くなるのを感じながら男から手を離れた。

「いってえ……よ、よしっ、じゃあ行くかあ……」

男は、片手で自らの腹を押さえつつ、もう片方の手で、ラナや他の奴隷の女の子を抱え込むようにして、店の外へと押して行った。

「ま、待てっ! 何処へ行くつもりだ!？」

店主は顔を紅潮させ、狂ったように怒鳴ってくる。

「どこって……俺の家だよ。最初に言っただろ? 俺がこいつらを助ければ、こいつらは人になれるって。俺はただそれを実行してるだ

けだぜ？」

口調の殆どが疑問詞であることに、若干の頼りなさを男に抱いたラナであったが、同時に、溢れんばかりの激しい怒気を、口調に含んでいる事に気づき、ほんの少しばかりの恐怖も覚えた。

「わけの分からんことを……。貴様がやっている事は立派な犯罪だぞ!？」

店主は男を指差しながら言った。

「いいんだよ。俺一人が舞台上の悪役になってこいつらヒロインが幸せになるのなら、どんな犯罪でも、精一杯演じてやるさ。あ、それとマスターさあ、奴隷狩りって知ってるよな？」

疑問形の頼りなさそうな口調から一転して、真剣な声で、男は店主に問うた。

「知らん訳が無いだろうっ！ それとこれと今、何の関係が……ま、まさかっ!？」

鈍いなあ、と男は呟いて、店主から顔を逸らし、扉の方に眼を向けた。その姿はまるで、何かを待っているようだった。

——奴隷狩り。確か、今、巷で噂になっている男女二人組みが中心の組織のことで、よく分からないけど、誰も見たことが無いような能力、魔法を使って、奴隷を助けるとかいう名目で、奴隷売買店を潰しまくっているらしい。潰された店の数は八十を越えて、逃がされた奴隷は三千人を上回るんだっけ。

ラナは、この間此処に來た客が、店主と話している内容を思い出した。

ラナは感極まった。奴隷売買店や世間の中では犯罪者とされている、男女の二人組み中心の悪党、奴隷狩り。それは、奴隷の者達にとっては、いわば救世主。

それもただの噂で、絵空事と思い当てにしていなかったラナたちだったが、實在し、さらに、今度は自分達をも救い出してくれるのなら、嬉々としないうかがおかしい。

「くっ！ 遠い都市の話だから此処には來ないだろうと思って、防

犯魔法を強化していないのは、間違いだったか！　だがなっ、警報魔法だけは掛けていたから、もうじき此処に、保安部が来るぞっ！
どのみち、お前は逃げられん！　奴隷狩りだかなんだか知らんが、調子に乗るな！」

店主は鬼の形相で男にういかかった。しかし、男は、そんなものには全く動じる素振りも見せずに、淡々とした口調で言い放った。
「まあ、今の主役は俺達だけだな」

「俺達？」

店主が聞き返す。

「そうそう、張り切るのはいいけどさあ——」

男が何かを言い切ろうとした瞬間、突然、耳をつんざくような音をあげながら、窓ガラスが割られた。

そこから現れたのは、長い灰色の髪を持った女だった。

灰色の髪の女は、窓ガラスを蹴破って、その勢いのまま、店主の顔面に左足で蹴りを入れた。

店主はそのまま吹っ飛ばされ、店のカウンター辺りにあった戸棚に、頭から突っ込んでいった。鈍く強烈な音をたて、戸棚にあった鎖や手錠、南京錠といった金属製の類のものが床に落ちた。

「横、気をつけろよ……って、遅かったか？」

男が呆れたように言う。すると、灰色の髪の女が続けて言った。

「何しているのですか、外はもう寒いのですよ？　早く来てくれな
いと困ります」

「悪い、悪い。ついそのマスターの話を聞き込んでしまった。あ、それとさ、さっきの俺の台詞かっこよくね？　惚れ直しただろ？」

「ん？　いいんだよ、正直に言ってごらん。さあ！」

「いえ、かなり引きました。ほんとドン引きです。ちょっと夢から抜け出せてないですよね？　私の腕見ますか？　鳥肌がすごいことになってますよ？　今度は何に影響されたのですか？　ヒロインとか……、気持ち悪いですよ」

「いや……ほんと、もう……ごめんね。泣きそうだわ、うん。あり

がとう、目が覚めた」

「それは良かったです」

男が顔を見なくても分かるくらいに落ち込み、それを見て、女は微笑んだ。

この世界で、灰色の髪などさほど珍しくもない。むしろ多数派であろう。しかし、それ故に、女の美しさが強調されていた。

ラナが灰色の髪の子に見惚れていると、女はゆっくりとラナ達の居る方へと歩いてきた。

「こんばんは。私は、この男の付き人みたいなものをやらせていただいております、フィレーヌと申します」

「あ……、はい——」

ラナは返答に困った。なぜなら、明らかに目上である筈の女から、相手を尊重する、敬語を使われたのに、自分は敬語の受け答えが出来ないからであった。

「ああ、無理に応えようとしなくても宜しいですよ？　これから、一つずつ覚えていけばいいのですから」

フィレーヌと名乗った女は、ラナの顔の高さまでしゃがみ込み、目線を合わせ、微笑んだ。その微笑みはとても美しく、それだけで一国を制圧出来そうだった。

フィレーヌはラナの頭を軽く撫で、その後、立ち上がり、男の方へと向かった。そして、ほんの少し言葉を交わし、フィレーヌが床に指を這わせた。

何も描かれてはいなかったが、フィレーヌが円の形に床を回り終えると、突然、眩いばかりの淡い碧に輝いた、大きな円が床に姿を現した。円の中には大小様々な文字が書き綴られており、中心には絵も描かれていた。それは、この世界で、人間の生活の全てを支配する「力」となる、魔方陣だった。

淡い碧の輝きは、収まる事を知らずに、暗かった店内を覆いつくした。さらに、窓や少し開いたレトロな扉からも、淡い碧の輝きが外へと溢れていた。

するとフィレーヌが、今も尚、輝き続けている魔方陣の中に足を踏み入れた。

長く透き通るような灰色の髪の毛が、碧の輝きに照らされた。その輝きと髪は、まるで、流れる滝のような波紋を映し出し、幻想的な光景を生み出した。

——綺麗……。

その光景は「人」としてのラナに初めて、美しさを感じさせた。汚いものしか与えられず、それしか見えなかったラナにとってその光景は、まさに本物の滝をも勝る、ラナの中での滝になった。

ラナやその他の子供がフィレーヌに見とれていると、男は急に、四人の体押し、輝く魔方陣の中に入れた。

急に体を押されたラナと他の子供は前のめりになりながら、よろけた。ラナは丁度、フィレーヌの体の前でよろけた為、フィレーヌに受け止められ、抱き合う形になった。

——気持ちいい匂い……。

これもラナにとっては初めての経験だった。それはまるで、自身を全て、包み込んでくれるかのような、そんな錯覚に陥るほどだった。

ラナがフィレーヌに抱きしめられていると、男も魔方陣の中に入ってきた。

「さて、店主も気絶しちゃったし、帰るか」

男がそう言ったその時、店の外から、けたたましい程の警報が徐々に近付いてきた。その警報につられて、近所に住む人達も、店の前へと集まってきた。

「なんだ、なんだ？」

「保安部？」

「そういえば、この店からさっき、怒鳴り声とガラスの割れる音がしたわ」

「なんか眩しいな。緑色に光ってんぞ？」

店の外が段々と騒がしくなってくる。

「お、おいっ！ マスターが倒れているぞ！」

その時、誰かが店の中を覗き込み、倒れている店主を見て、そう叫んだ。

「本当だっ……。ん？ おい、あれは魔方阵じゃないか！？」

「誰か中にいるぞ！」

「あれはまさか……。！ 間違いない！ 奴隷狩りだ！」

今度は、またもや誰かが、漆黒の少年の正体に気付いた。

「貴様っ！ おとなしくしろっ！」

保安官であろう一人の青年が掌に魔力を溜め、此方に向かって叫んでいる。

「うわぁ……。うぜえ」

しかし、男は全く動じる事無く、冷静に周りを見つめている。

保安官は溜めた魔力を、手をピストルの形にし、一発だけ威嚇として打った。青白く光る魔力の弾が魔方阵の数メートル横の壁に当たった。すると壁は、木屑を舞い上がらせ、粉々になって碎けた。ラナと他の子供が腰を抜かして、座り込む。

しかし、男は構わず続ける。

「おお、保安官さんは魔力をそのまま打ち出す能力なんだな。つか、んなもんでビビる訳ねえだろ。威嚇なんかしてる暇があったら、殺すつもりで攻撃しろバカ」

「なんだと貴様……。？ 保安官への侮辱行為か？」

男の言葉を聞いた保安官は憤慨した。

「違うな。アドバイスだ。ついでに攻撃の仕方も教えてやろうか？」

男はそう言いながら、左手の人差し指を顔の前に持っていき、何かを呟いた。

「まあ、せいぜい気をつけろよ？ では……。『お手を拝借——』」

「なにを言っ——」

一陣の冷たく鋭い「何か」がラナの頬を撫でた。その瞬間、保安官達もろとも、店の前にいた、野次馬達が全員、店の中にある檻の中にぎゅうぎゅうに詰め込まれていた。

一体何がおきたのか、ラナはおろか、檻に入れられた野次馬には知る術も無く、ただ、見つめていることしか出来なかった。

「なっ……!?!? 一体何が起こっている!?!? 何故私達は檻の中にいる!?!?」

保安官や住人達が口々に叫ぶ。もちろん、男は気にも留めない。男はラナや他の子供の手を取り、立たせた。そして、檻の中の人々に向かって、おやすみなさい、いい夢見ろよく、と言ってフィレーヌ方へ向き、頷いた。

その時、保安官が言った。

「ふんっ! 所詮は犯罪者! 貴様だっでどうせ奴隷を奴隷として扱うんだろ!?! この偽善者がっ?」

男は数秒黙った後、保安官の方を向いた。男が保安官を見る、漆黒に彩られた眼は、とても冷たく、感情の一切が読み取れなかった。「偽善者ってのは『人の為の善者』だろう? それに俺はこいつらを助けた。さっきそこで気絶してるマスターにも言ったけどこの時点でこいつらはもう立派な『人』だ」

「屁理屈を言うな!」

「だから、寒いですってば」

保安官に続きフィレーヌが言う。

「ホントやめて……お願い。俺が悪かった。……あ、そうだ、最後に一発いくか」

そう言っで男は、左の掌を保安官達の入っている檻の方へと向けた。そして先程とは異なつた呪文を詠唱した。

「気絶したマスターにも言っでいてくれる? ——次、こんな事してるの見つけたら、ためらい無くぶっ殺すってな。まあ、生きていられたらな……なんちって」

「何を……!」

「『撫子——』」

その瞬間、男の掌から、またもや「何か」が飛び出した。しかし、先程とは全く違う、得体の知れない「何か」。ラナ達は背筋が凍り

つく思いでそれを見た。否、見てしまった。

魔方阵の淡い碧の輝きを飲み込むほどの、黒く、黒く、黒い、一切の混じりけの無い黒。それが店ごと全てを飲み込んだ。

しかし、それも一瞬の出来事。真っ黒な闇は一瞬で引くと、元の店の風景に戻った。唯一変わっていたのは、檻の中の人々が全員、顔から生気を失っていること。

男は、さも何事も無かったかのように、もう一度、フィレーヌの方へ向き直った。その刹那、下から服が大きく靡くほどの風が吹き上げてきて、輝きを増した碧色の光りが、ラナ達を包み込んだ。

一瞬にしてその場から消えた。比喻でもなんでもなく、本当にその場から消えた。まるで、元々、そこにいなかったかのように。

後に残ったのは、倒れた大勢の人々と、ほんの少し荒らされた店内。その他には何も無い。一方には最高の結末。一方には最低の結末。上手く混ざり合った運命。

概念が支配するような世界でも、例外が存在する事を、この日、心の底から思い知った人間が一体どれほどいるのだろう。

~~~~~

光が収まりラナ達が目を開けると、そこにはとてつもなく大きな館が建っていた。左右を見渡したただけでは到底、全てを確認する事ができないくらい大きな館であった。

そしてさっきまで居た町は何処にも無く、ただその館だけがラナ達の眼前を埋め尽くした。そのラナ達の隣には漆黒の男の人と灰色の髪の女、フィレーヌがいた。

男は館に近付いて行った。それに続くように、ラナ達はフィレーヌに背中を押された。急な事に、ラナ達が途惑っているとフィレーヌは優しく微笑み、まだ少し、怯えが残るラナ達に囁いた。

「大丈夫です。私共は貴女方を助けただけですから」

「え……………」

その声は優しさしか含まない、慈愛に満ちすぎている声だった。

「何してんだ？ さっさと来いよ？」

男がフィレーヌ達を急かす。

「女の子には色々あるのですよ」

「はあ？ なんだそりゃ？」

「さあ、行きましょう？」

「は、はい……………」

フィレーヌの優しい手つきに後押しされ、ラナ達は館の玄関の前まで連れて行かれた。そして男が大きな玄関を開けた。光りが漏れ出し、中の様子がラナの眼に映し出された。

『お帰りなさいませ、ご主人様！ フィレーヌ様！ そしてようこそ新しき仲間の方々！！』

そこには大量の、メイド服を着た女の人や、数人の執事服を着た男の人、それに私服であろう服を着た人達が寸分の狂いもなく、レッドカーペットの左右に悠々と佇んでいた。ラナ達が呆然としていると、男がラナ達の前に立ち、微笑みながらこう言った。

「ようこそ俺の館へ！ そして——今日から俺がお前達のご主人様だ！」

「……それ毎回おっしゃっていますが、恥ずかしくないのですか？」  
「うっせ」

こうしてラナ達、『元』奴隷は此处で過ごすこととなった。

人と人との出会いというものは、何時、どんな形で現れるかわからない。それがたとえ、『元』奴隷と主の間係であろうと。所詮、人の出会いなんて、そんな辺鄙なものなのだ。

何処かの世界の、誰かの願った国の中にある、誰かが大切にしている都市。そこに理不尽が蔓延っていたとしても人は出会う。

## 第一話 奴隸狩り（後書き）

最近、ラジオとかしたいなあって思ってます。

あ、それと体育祭の練習がもういやだ〜  
リレーの第一走者って、緊張感がハンパねえです。

## 第二話 浮いて、落ちてランデブー

小気味のいい鹿おどしの音が、等間隔で鳴り響く。そのせいか、間接的に時間の流れを少女達は感じていた。

ラナ達は今、館の中にある、大きな温泉に来ていた。そこは露天風呂になっており、火照った体に、心地の良い夜風が沁みる。

とても静か。なんの雑音も無く、ただ心を和ませる流水の音だけが、夜空へと吸い込まれていった。

——気持ちいい……。

ラナは、とどまることなく湯気が昇る湯船に身を預けながら、一体何年ぶりになるであろうか、体を清める事の清清しさを痛感していた。

先程まで感じていた、未来への絶望は一転、希望、というよりは、幸福へと変わっていた。

「ラナ」

ラナが寛いでいると、隣へ、緑色をした長い髪を振りながら、一人の少女が近付いてきた。水しぶきを上げながら近付いてくる彼女の名前は、リイシャ。ラナと同様、先程まで檻の中で地獄を味わっていた奴隷の一人だ。

「如何したの、リイシャ？」

「あったかいね。空が綺麗だね。気持ちいいね。あとは……」  
そう言っリイシャは顔をしかめた。

「ちゃんと、頭の中で整理してから言っよ。こっちまでこんがらがっちゃう」

「えへへ、ごめんよ」

奴隷として生活していた時からそうだったが、リイシャはとても明るい。まるで奴隷とは思えないような明るさ。ラナが檻の中に居た時も、リイシャが笑顔を絶やす事は殆ど無かった。もちろん、ずっと笑顔なんていうわけではない。辛いことのほうが多かった。そ

れでも、一日の終わりには必ず、ラナや他の子ども達を、笑顔で励ましていた。

ラナはリイシャのその明るさを尊敬していた。……あくまで明るさだけであるが。

「それにしても気持ちいいね。ホント、諦めずに生きてて良かったよ」

リイシャは眼を閉じ、夜空に顔を向け、深呼吸しながら、感慨深くそう言った。

「本当、生きてて良かった——」

ラナはリイシャの言葉に深く、共感していた。

ラナは、リイシャと同じように、夜空を見上げた。暗闇の中には幾つもの光りが宿っていた。それはまるで、自分達の人生を表しているかのようだった。

——それにしても……。

温かさを感じながら、ラナはふと思った。

——私達だけが、こんな幸福を与えてもらってもいいのだろうか？

この世界には、こんなに広い温泉にも入れず、この綺麗な夜空を見ることも出来ない奴隷達がまだまだいるって言うのに。

ラナは、自分に対する嫌悪を心の中に蔓延らせた。

その時、ラナの思考を遮るように、リイシャが疑問をぶつけてきた。

「ねえ、ラナ。あの黒髪の人ってなんで奴隷狩りなんかしてるんだろーね？ こんな広い館に住んでるんだから、お金ぐらいいくらでもありそうなのに……」

その質問は、ニュアンスが違うものの、似た様な事をラナも思っていた。

「本当だね……。それに私達みたいな奴隷にこんな事してくれるなんて——」

「うーん、なんだか変な人だしね。それでもすっごい格好良かったよ。あたし達を助けてくれた時、本当に嬉しかったし」

リイシャが声と豊満な胸を弾ませて言う。ラナはそれを羨ましそうに見つめていた。

漆黒の髪と眼を持った奴隷狩りの男は、「人」としてのリイシャに初めて、「人」を感じさせた。

リイシャの言葉にラナも頷いた。確かにあの男の立ち振る舞いには、目を見張るものがある。ラナは目の前で話したことがあるため、思い出すと今でも顔が紅くなるほどだ。

しかし、それ以上に今のラナの心を占めているものは、「人」としてのラナに、初めて、美しさを感じさせた、灰色の髪の女の子のことが気になっていた。

最初に会ったとき、自分のことをフィレーヌと名乗っていた。

美しく伸びた灰色の髪。歩くと、流れる水のような波紋を残す。それでいて全てを見透かしている故に、何処か憂いを帯びているかのような、灰色の眼。

その全てが、「人」となった今のラナに感情を与えていた。

しばらくラナは温泉に浸かりながら、まだ、大きな動きを見せない星がちりばめられた夜空を眺めていた。横ではリイシャが自分の長い髪を、湯に浸け、弄んでいる。

そこに二人の少女が来た。一人は金髪のショートカットで、十二、三歳かと思われ、もう一人は、赤みのかかった茶髪を後ろで二つに結び、俗に言うツインテールにしている。歳は恐らく、十歳にも満たないであろう。

水音に気付いたラナは、視線を夜空から、二人の方へと移した。

「あ、ルッカちゃん、シフォウちゃん。どうしたの？」

ラナは二人の名前を呼んだ。その声にリイシャも気付き、自分の長い髪を後ろへまわし、三人の下へと、間をつめた。

「……ラナさん」

ルッカと呼ばれた、金髪の少女は、不安そうな面持ちで、ラナの右隣へ移動する。

「どうしたの？」

ラナが尋ねると、ルツカは俯き、震える声を必死に振り絞り、自分の考えを口に出した。

「わたし……怖いです——」

「怖い？」

恐怖——。それは、檻の中で奴隷として生活していた、つい先程まで、少女達の心の真ん中を強く支配し、がんじがらめにしていた絶対的なモノに他ならない。

与えられない日はない、苦痛や苦悩。精神と身体、両方に刻み込まれ、簡単には解けそうにも無い、硬く、激しく、重く、縛られた鎖。

いくら、今が幸せでも、これも偽りではないのか、という不安が少女達の頭の中を過ぎるのは当たり前だ。ましてや、まだ十歳前半の小さな子供たち。容易に人を信じる事も難しいはずだ。

ラナもその事は重々承知していた。現在の幸福とは全く対極の位置にある、恐怖。そんなものに立ち向かえるほど、少女達の心は強くない。

「はい……怖いです。本当に善意だけで助けてくれたのか？　いつものように奴隷として傷つけられるんじゃないか？　こんな事ばかり考えてしまうんです——」

ルツカは両腕で自分の身体を抱きかかえる。全身が震えている。

「……」

「わたし達はどうなるんですか？　また、奴隷生活に戻るんでしょうか？」

ルツカの涙が頬を伝い、湯の中へ墜ちる。他の三人も何も言えずに、ただ俯くだけであった。

「——いいんじゃない？」

「え？」

夜風が耳をくすぶり、鋭い音をたてた時、唐突にリィシャが言葉を発した。

「奴隷扱いでいいじゃない。今までそうやって生きてきたんだからさあ。それよりも、これから奴隷としてこき使われるのに、こんな大きな温泉に入れてくれるなんて、相手の最後の情けだと思うよ？　それなら、今だけでも笑ってようよ。ね？」

「――リイシャ……」

リイシャの目は少し潤んでいた。それでも彼女は笑っていた。ラナは、いつ、どんな状況、雰囲気でも前向きに考えられる、リイシャの明るさを心から尊敬していた。

普通なら言うべき事ではないのだろうが、リイシャが放ったその言葉は、なぜか、皆を和ませた。

「なんちって、えへへ……あゝあ、なんかのぼせちゃった！　さ、あがろう？」

「うん……」

ラナは、少々言葉を濁しながらも、口元だけ緩ませ、答えた。リイシャはそう言って、水を体中から滴らせ、温泉から出た。それにつられるように、ラナ達も温泉からあがった。

しかし、ただ一人だけ、茶髪の少女、シフォウは未だに身体が震えており、湯から出ようとしなない。いや、出ようとしなないのではなく、出られないのだ。この中で一番、心も体も小さいシフォウにとって、奴隷の生活というものは耐えることも、絶えることも出来なくさせる。とてつもなく小さいその身体に、巨大な、不安、恐怖、絶望が押し掛かる。

とは言ってもシフォウのような反応がごく普通である。「力」を恐れ、畏れるのは「人」としては当然のこと。リイシャのように前向きに振舞う事など、そうそうできるものではない。

「――？」

その時、ラナがシフォウに手を伸ばした。当然、頼りなく、小さな力であった。

それでも――

「行こ？」



「……ん」

それでも、少女達の瞳には輝きが宿っていた。  
ただの開き直り。諦め。そう思えば、そうなのかもしれない。けど、それで少しでも楽になれるのなら――

「皆様、あがられたようですね。では、此方の服をどうぞ」

『……………』

四人が覚悟を決め、温泉からあがると、目の前には、灰色の髪を持った例の美女、フィレーヌが四人分の服を持ち、微笑みながら立っていた。

すると、フィレーヌが、タオルを身体に巻いたラナ達に服を手渡していった。

ラナ達が手にしたのは、一人一人の髪の色に合ったワンピースとTシャツだった。

ラナは灰色、リイシャは緑、ルツカは黄色、そしてシフォウには赤色のワンピースが、Tシャツはそれぞれの色より少し薄めの色だった。

それらを着込んだ四人は、奴隷の頃とは一転、何処にでもいるような少女となっていた。

「あら、やっぱりよく似合いますね。良かったです」

そう言ってフィレーヌは再び微笑む。

「あ、あのこの服……」

ラナは戸惑いを隠せない。他の三人も、今の状況が理解できていない。

「それは技術係の方達が作ってくれたものですよ。また、会ったらお礼を言っておいてくださいね？」

「え、あの……いや、ちよっ……ええ？」

「ふふ、そんなに硬くならないで、もっと楽にしてください」

そう言ってフィレーヌは浴場のドアを開けた。すると、涼しい風がラナ達の横を通り抜けていった。その風は、少女達の火照った身

体を丁寧に、優しく、包み込むように冷まし、覚まさせていく。

「では今からこの館を案内します。どうぞ付いてきて下さい」

少女達は、そういったフィレーヌの様子に、これから奴隷として扱われることなど、微塵にも感じられず、一体如何すればいいものかなす術も無く、佇むだけであった。あのリィシャでさえも途惑っている。

本当に自分達が奴隷だという事を分かっているのか。風が通り抜ける中、ラナはそんなことを考えていた。

「いかなさいましたか？ 此方ですよ——ああ、それもそうですよね。途惑わないわけが無いですよね」

フィレーヌは納得したように、少し頷き、少女達の元へと近付いていった。そして彼女は、四人に、高く、透き通るような声で呟いた。

「最初に言ったように、私達は貴女方を助けたいだけ——。そこに一切の嘘偽りはございません。簡単には信じられないかもしれませんが、それでも、いつか信頼を得られるよう、精一杯の努力をさせていただきます」

「——……」

ラナ達の心には、ゆっくりと流れるように、それでいて確実に、フィレーヌの言葉が沁み込んでいった。

「失くしてしまった貴女達の人としての形、必ず、私達を取り戻してみせます。意味なく棒に振った今までの時間……。——近付けば傾いているこの世界でも、遠くから見れば綺麗なのですよ？」

最後の一言は少女達には理解できなかった。わざと理解させないように言ったのか、それは分からないが、それでも、ラナ達に意味を、意志を、意義を持たせた。

「さて、では行きましょう。お部屋へと案内いたします」

「……は、はい」

フィレーヌは浴場の扉をくぐって行った。ラナ達はまだ戸惑いを隠せないまま、ゆっくりと歩みを進めた。

〃〃〃

浴場から出ると、そこは大きなロビーになっていた。ロビーには沢山の女に、ところどころ男が混ざっており、実に活気に溢れていた。

それを見たラナ達は、先ず、その人数に圧倒された。此処だけで百人はゆうに超えているだろうか。全員が笑いあっていて、実に幸せそうな顔をしていた。

ラナはその光景を見て、自分の全く知らない、異世界に迷い込んだように思った。ルツカとシフォウは未だに怯え、リィシャの影に隠れている。

「こちらです。おそらく迷ってしまいますので、なるべく離れないようにして下さいね」

フィレーヌはそう言って、ロビーの左側にある、大きな階段を昇っていった。ラナ達もそれについて行き、階段を上がり終えたところで、目の前の長い廊下を歩いた。

そこには、等間隔に木製のドアが並べられており、それぞれの間にある、レトロな電灯が、全体に温かみを感じさせる廊下に敷かれた、レッドカーペットを鮮やかに彩っていた。

扉を十ほど超えた辺りだろうか、フィレーヌは立ち止まり、ラナ達のほうへと向き直った。扉の横にある銀のプレートには、230という番号と四人の名前が彫られていた。

「こちらが、今日から貴女達が生活するお部屋でございます。どうぞお入り下さい」

そう言ってフィレーヌはドアを開けた。

するとそこは――

『広っ!?!』

シャンデリアが飾られた天井。三回寝返りをうっても落ちそうにない、おおきなベッド。部屋の中央には、十人ほど腰掛けられるソ

ファとテーブル。奥にはダイニング。そして、とにかく広い。ラナとリイシャだけでなく、先程まで怯えていたルツカやシフオウまでもが声を揃えたほどだ。

「本来ならば、お一人ずつ部屋をご用意させて頂くつもりでしたが、館の敷地や人数の関係上、どうしても四人部屋しか残っていなかったのです。申し訳ありません」

そう言ってフィレーヌの顔が曇った。それでも美しいその顔を見て、焦ったラナは咄嗟に言葉を発した。

「い、いえ、あの……充分すぎます——」

それは、紛れもない本心だった。

「そうですか？　そう言ってもらえると助かります。でも、遠慮はしないでくださいね？」

「はい……」

フィレーヌとラナがこんなやり取りをしている間、他の三人は固まっていた。

「では、皆さん。お入り下さい」

フィレーヌに促され、少女達は部屋の中へ入った。

中は清潔感が漂っており、良い香りがラナ達の嗅覚を擦った。

「ひろ……」

リイシャが目丸くしながら呟いた。

「部屋の中の案内でもしましょう？」

「あ、はい」

フィレーヌの気遣いに、リイシャとルツカが頷く。

「先ずは此方には水周りのものが……」

そう言ってフィレーヌは二人を連れて行った。その時、シフオウが立ち止まった。

「……」

「どうしたの、みんな向こうに行っちゃったよ。ん？　何見てるの？」

シフオウは何かを見つめていた。その事に気付いたラナが尋ねた。

そして、シフォウの見つめる先を見ると、そこには、ガラス張りのテーブルの上に置かれた、果物入りのバスケットがあった。緑、赤、黄色などの様々な色の果物が二人の目を楽しませた。

「……美味しそうだね」

「うん——」

「食べてもいいのかな？」

「分からない——」

ラナの問いにシフォウは淡々と答える。

「けど——」

「けど？」

シフォウはまた呟いた。

「私達の部屋って言ってくれたんだから、食べてもいいと思うの！」  
そう言った瞬間、シフォウはテーブルの上のバスケットに手を伸ばした。見る見るうちに果物が消えていく。

「……結構積極的なんだね」

ラナは呆れたように呟いた。そして、同じようにバスケットへと手を伸ばす。

「おお！　おいしいね、シフォウちゃん！」

「うん！」

今まで、食べ物という食べ物を食べてこなかった。そんな彼女達にとってはおたかが果物でも、いうなれば秘宝なのである。

二人の勢いは止まらない。既にもとの半分以下にまで減っている。そこへフィレーヌと、説明を聞き終えたリイシャとルツカが戻ってきた。二人はテーブル横のソファに座り、バスケットの中の果物を食い漁っているラナとシフォウを見つけた。

「あ！　ずるっ！」

「美味しそうですね」

リイシャに続きルツカも果物を見た。ルツカは先程の事を思い出している名譽挽回のためか、努めて冷静に言った。それでも、それを見るルツカの目はきらきらと輝いていた。リイシャに至っては既に

涎がたれている。

二人はフィレーヌの方へと顔を向けた。フィレーヌは微笑みながら頷いた。ラナとシフォウは未だに食べ続けている。

フィレーヌから了承を得た二人は、テーブルへと向かい、バスケットへと手を伸ばした。

先ずリイシャが一口、真っ赤な林檎をかじった。

「な、なんておいしいんだー！」

「わ、私も……お、美味しすぎます」

ルツカは黄色く染まったバナナを口にした。甘ったるく、ほんのりとした味がルツカの口の中に広がった。

四人が夢中になって食べていると、フィレーヌが扉の方へと歩いていった。

「では皆さん。夕食の準備が出来ましたら、呼びに来ますので、それまで御寛ぎ下さい」

しかし、四人は挨拶する暇もなく食べて続けている。そのことを失礼と感じる余裕は少女達にはなかった。もちろん、フィレーヌもその事については重々承知している。彼女はその事について別段、とがめる素振りも見せずに扉を閉め、部屋を後にした。

それから数分も経たないうちにバスケットの中の果物はなくなっていた。

奴隷生活の時には感じる事のできない至福が退化した味覚を再び呼び起こす。その幸福をかみ締め、ラナ達は快楽に浸っていた。

一体、どれだけの時間そうしていたのだろうか、少女達に再び空腹が襲ってきた。ラナは時計を見た。時間にしてたった三十分。それだけでまたもや空腹になるほど、少女達の腹は物を欲していた。

そうして、ラナが自分の飢えに驚愕していると、突然、部屋のドアがノックされた。

「うわっ!?! ど、如何しよう!?!」

リイシャの身体がビクツと震えた。彼女だけでなくラナもおどおどしている。

「な、何うろたえてるのリイシャ？ 早く出てきてよ」

「え？ いや、ちよっ、そんなこと言うならラナが行って来てよ！  
……っていうか声、震えてるよ！？」

「は？ ふ、震えてないもん！ そ、その前になんで私が行かなきゃなんないの？ ほら早く行ってきてよ！」

そう言ってラナはリイシャの背中を押した。

「お二人とも、何してるんですか？」

ラナとリイシャがお互いに責任を擦り付け合っていると、ルツカが尋ねた。

「いや、だってだって！」

「リイシャうるさい！」

リイシャが叫んでいるところにラナが一喝する。そしてルツカは扉の方へ指を差しながら言った。

「シフォウちゃんが行きましたよ？」

『えっ？』

二人が、ルツカが指差した方向を見ると、シフォウが扉に向かって、てくてくと歩いて行った。二人は呆然としていた。

「やっぱり積極的だね……シフォウちゃん」

ラナが呟いた。そしてシフォウは扉を開けた。その時、ラナの身体が一瞬、強張った。

なんと扉の前にいたのは、彼女達には名前も知らされていない、ラナ達を奴隷売買店から連れ出した、漆黒の髪に、漆黒の瞳を持った男だった。

ラナの目が見開く。それとほぼ同時に男は喋った。

「おまちどうさん」

## 第二話 浮いて、落ちてランデブー（後書き）

ここってツイッターとかブログの代わりになるんじゃないですかね？



### 第三話 過去は人を強くするのだろうか

見渡す限りの人、人、人。

現在、男に連れられ、ラナ達四人はとてつもなく大きな食堂に来ていた。そこでは、何百人もの人が食事をしており、何人もの調理師が忙しなく、それでいて幸せそうに、笑顔を絶やさず働いている。その調理師たちの手からは、鈍りきった五感を突き刺し、匂いだけで満腹になりそうな料理が大量に作られていて、食堂の中央のバイキングエリアに次々と運び込まれている。

男は、奥にあった大きなテーブルの両端に少女達を座らせた。そして、自分はそのテーブルの、少女達の丁度真ん中にくるように座った。

テーブル横の壁一面を覆うように張られた窓からは、大きな草原と暗い海が見えており、草原に敷かれたレンガ造りの歩道を、街灯が淡く照らしていた。そして、暗い海の上には月が昇っており、その幻想的な光景が一層、見るものをノスタルジアな雰囲気させた。ラナがその景色を食い入るように眺めていると、男がテーブルの端っここに置いてあったメニューを取り出し、ラナ達の前へ広げて置いた。

「はい、これが今日のメニュー。毎日コロコロ変わるから、その日しか食えないモンもあるぞ？ 好きなだけ選べな」

「は、はい……」

そう言ってメニューを覗き込んだ四人の目に飛び込んできたものは、見たこともないような色とりどりのご馳走。一目見ただけでは到底決められない。

「まあ、その中から決められなかったら、あそこにあるバイキングエリアに行きな。あそこの中身はあんまり変わんねーから常連がよく使ってる」

男は、一番多く人がいる場所を指差し、そう言った。

そうこうして、ラナ達がどれから食べようか迷っていると、灰色の髪の女、フィレーヌがやって来た。そして男に喋りかけた。

「お楽しみのところ申し訳ありませんが、そろそろ……」

「……もうそんな時間かよ。あゝあ、時が経つのは早えーなおい」  
「そうですね」

男はそう言うと、席を立ち上がり、なにやら食堂の入り口の横にある、壇上のようなところに向かって歩いていった。そこには、四人の女と三人の男が私服姿で、男が来るのを待っていた。

「では皆様、少々ここで待っていて頂けますか」

「はい……」

今から何が起こるのかわからないラナ達はただ、ぼうっと壇上に上がっていく男を見ていた。その内、フィレーヌも壇上へ向かって行き、その上に上がった。二人が立ち去ったその数秒後、銀のお盆を持った、紫色の髪をした女が飲み物の入ったグラスを、ラナ達のテーブルに置きにきた。

「あら？ あなたたち、もしかして今日入った新人さん？」

「あ、えっと……」

「はい、そうですが――」

ルツカが言葉に詰まったのを見て、ラナが紫の髪の女に答えた。

「そっか。……まあ、なんの指示もないし、別にいいか。じゃあね」

ほんの少し間を空けて紫の髪の女は、再び他のテーブルのところへ、グラスを運び始めた。

しばらくすると、壇上の上の数人と喋っていたフィレーヌが、壇上の真ん中に設置されていたマイクをスタンドから取り外し、声を上げた。

『では、皆様。これより、技術係六名の卒業を祝福し、送別会を行いたいと思います。手元にグラスは行渡りましたでしょうか』

フィレーヌがそう言うと、今までざわついていた食堂内が一気に静まり返った。

『では先ず始めに、この館の主、ユウトから一言いただきたいと思  
います』

ユウトと呼ばれた黒髪の男はフィレーヌからマイクを受け取ると、  
壇上の真ん中へと移動した。

「あの男の人、ユウトって言うんだ……」

ラナがフィレーヌのスピーチを聞き、そう呟いた。

「珍しい名前ですね」

「そーかな？ まあ、ずっと牢屋の中だったし、名前なんて気にし  
たことないからだと思うけど」

ルッカとリイシャがラナの呟きの後に続いて言った。

男は、軽く息を吸い込み、マイクを通し食堂内の人々に向かって  
話し始めた。

『えーっと、まあこの送別会も毎度のことだから形式じみてきてる  
けど、今日を持って此処にいる六人はこの館からいなくなってしまう。  
う。いつも言っているけど俺としては誰一人として欠けて欲しくな  
い。それでもこいつ等は自分の意志で、自分達の進むべき道を決め  
た。奴隷として生活していた頃からは想像もつかない勇気だ。皆も  
それを称えて、応援してやってくれ』

男が言い終えると、食堂内には歓声が響き渡った。

「ううー、ユウトさあん。うえーん」

「泣くな泣くな」

その歓声の中、壇上では六人のうちの四人が涙を流していた。

「うう……、やっぱ淋しいっす、アニキい……」

「うわぁ、似合わねー」

「うおっ！？ 酷いっすよアニキ！」

ガタイのよい、大きな男が、ボロボロと涙をこぼしつつ、男に呆  
れられ、益々涙が溢れていた。

「ユウト様……」

男達が盛り上がっていると、一人の女が男に近付いた。

「おう、どーした」

「今の今まで、身寄りのない私たちを養って頂きありがとうございます。外に出たら、きっと、世界に名を馳せる人物になってみせます」

「ああ、期待してる。お前達なら絶対やってくれるって信じてる。なんせこの館出身だからな！ あはは」

「……はい」

女は照れたように笑った。

「さて、じゃあ今日は最後の晩餐だな。しっかり楽しんで来い！」

男がそう言うのと、壇上にいた六人が降りてきて、各々の親しい間柄の元へと駆け寄って言った。

「……なんか、此処のシステムが良くわからないんだけど。どう、ラナ？」

それまで、会場内の盛り上がりを、ただ呆然と見ていた四人の中で、リイシャが唐突にラナに尋ねた。

「私もよくわからないよ。ただ、あそこにいた六人の人たちが、この館からいなくなるってことだけは分かった」

ラナの言うとおり、先程壇上にいた六人は今日を持ってこの館から去る。その事はラナだけでなく、ルツカも分かっていた。シフオウはというと、式が始まる前から、バイキングコースの料理をずっと見ている。

「あら？ 皆様、何も食べておられないのですか？」

そう言ってフィレーヌが四人の元へやって来た。

「あ、えっと……」

「もし、そのままでも宜しいのでしたら、少しお時間を頂けますでしょうか？」

フィレーヌはそう言って、四人を席から立ち上がらせ、さっきの壇上へと連れて行った。

五人が壇上へ上がりきると、黒髪の男が壇上の隅に腰を下ろしていた。そして、全員が上がって来たのを確認すると、腰をあげ、マイクをスタンドから取り外した。その間にフィレーヌは四人を一行

に並べさせ、食堂の方へと向けた。

「うわ……人多くない？」

「う、うん。かなり怖いね……」

リイシャとラナは壇上から見る、食堂内の人の多さに驚愕した。

しばらくすると、全ての準備を終えたのか、男がマイクを口に近付け、先程と同じように、喋りだした。

『あーあー。聞こえる？ おっけー？ ……よし、はい！ じゃあ全員再び注目！』

男がそう言うのと、食堂の中は再び静けさを取り戻し、何百という目が壇上へ向けられた。

その眼差しに、ラナたち四人は、萎縮するばかりであった。

『さあ、此処にいる四人は、毎回恒例の新人だ。卒業していく六人に代わって新たにこの館の住人になる。手前側からリイシャ、ラナ、ルッカ、シフオウだ。みんな、よろしく頼むぞ』

食堂内には歓喜の声上がる。ラナ達には何が起こっているのかはわからない。ただ、自分達が此処に迎えられている事だけは、身をもって理解できた。

『まあ、そろそろ時間もあれだし、もう歓迎会は終わっておく。後は勝手に騒ぎな』

そう言って男はマイクをフィレーヌに渡し、壇上から四人を連れて降りた。その足で男は四人を空いていたテーブルに座らせた。

そして四人の少女と、ユウトと呼ばれた男はここで初めて、ちゃんとした会話をした。

「さてと、聞いてのとおりお前達はこの館の新人だ。今日から一切の気兼ねなく、ここで生活してくれ」

ユウトがいい顔でそう言った。しかし、四人はただポカンとしていただけであった。

「……えっと、何かリアクションしてくれないと困るんだけど」  
「あ、ごめん……なさい」

ユウトが拗ねた様な顔を見せる。ラナはそれに罪悪感を覚え、素

直に謝ってしまった。

「何をやっているのですか」

「おう、フィレーヌ」

すると、五人の元にフィレーヌがやって来た。手には六人分のグラスと、一本のボトルが乗った銀のお盆を持っていた。

「こんな小さな女の子に謝らせるなんて、紳士としての嗜みがなっていないですね」

「すみません……」

「では、皆様の分の夕食でも取ってきてください。今日は料理係のメインディッシュが堪能できるそうですよ。この方達の分は予約してありますので」

「料理係のメインディッシュ？ 料理長のじゃなくて？」

「料理係の皆様が案を出し合って作ったものらしいです。ほら、早く行ってきてください」

「全く……あの料理長は——」

ユウトはそう言うのと、席から立ち上がり、厨房の方へ向かっていった。

そしてフィレーヌは、グラスを、全員のところへ置き、ボトルを軽やかに開け、少量ずつ注いでいった。

「さあ、皆様、お疲れのようですね」

フィレーヌは微笑みながらユウトの開けた席の横に座りながら四人に尋ねた。

少し戸惑いながらもリイシャが答えた。

「正直、何が何かよく分からないです……」

それを聞いてフィレーヌは言った。

「ふふ、それもそうですよね。では何が何かよく分からせてあげましょう」

フィレーヌは一度席に座りなおし、真剣な表情で話し始めた。

「さて、何から話しましょうか。やっぱりこの館についてですよ。まず、この館が存在する目的、その一つは『奴隷制度の廃止』です」

「――！」

その言葉を聞いたとき、ラナ達四人は息を飲んだ。

「正直、私達は今の世の中の制度に不満を持っています。人が人を道具のように扱うなんて間違っています。誰しものが、意義も意志も、息でさえもする術を持っているのですから。」

フィレーヌの言っている事は一理ある。確かに不幸になる人が多すぎる。ただ、そういう世の中になっているのだから仕方がない。ラナ達はそのような思考をしていた。

フィレーヌは一度間をおき、再び話し始める。

「そこで私達は、ユウトを筆頭にある数人のメンバーと共に各地方の奴隷を脱走させているのです。それで巷では奴隷狩りなんて言われているのです。こちらとしては買ってもいないし、狩っているつもりもないのですが」

ラナ達はフィレーヌの話に食い入り、グラスにも手を付けようともしない。

「では次は館のシステム等ですね。この館には現在、約三百人の元奴隷達が暮らしています。その全員が六つある係のいずれかに属しています。そして先程のように、もう社会にでて活躍できると判断された場合や、本人が外に出る事を希望すればいつでも外の生活が出来ます。こちらとしては普段の外出は禁止していないので、ここで住んでいてもまったく構いません。食事などは此処を使ってもらっても、部屋に持って帰ってもらっても結構です。入浴は部屋に備え付けのバスルーム、もしくは先程の浴場を使って下さい。そのほかの日常生活に必要なものは全て揃っております。まあ、この程度ですね」

フィレーヌは、簡単な説明を終わらせると、グラスを取り口につけた。一口だけ口を含み、喉を潤す。そしてその動作を一連の動きですると、続けてラナ達に聞いた。

「大まかな性質はこの程度です。何か質問はございませんか」

「いえ……、特には」

「じゃあ私が」

ルツカがそう言った時、ラナが手を挙げた。

「どうぞラナさん」

「私はまだあなた達を信用できないです」

「っ!?!? ラナ!?!?」

急なラナの質問に、リィシヤは思わず叫んでしまった。

ラナに得体の知れない相手に反抗するだけの度胸があったのか、それが今、他の三人の心の中を占めていた。恐らく、何度も死んだような経験をし、さらにこのような逃げ出すことの出来ない、何処かわからないような場所に連れてこられ、全てを覚悟しているのだろう。その事に、フィレーヌは気付いていた。

ラナはかなり怯えている。その証拠に、ラナの硬く握り締められた拳が震えている。そんなラナに、フィレーヌは静かに、囁くように答えた。

「それが普通です。それでも大丈夫ですよ。必ず信じてもらえる自信がありますから」

グラスの中の氷が音を立てて崩れた。

「持ってきたぞ〜って……あれ? あの人達は?」

黒髪の男、ユウトが六人分の食事を運んで来た。しかし、そこには既に四人の姿は見えず、フィレーヌが一人、グラスを持ち眺めているだけであった。

ユウトの問いにフィレーヌはグラスを静かに置いて答える。

「皆様、お部屋に戻られましたよ。お疲れのようでしたね」

「そっか……じゃあさ、後でこれ運んどいてあげてくれ」

「かしこまりました。では私達の方は頂きましょう」

フィレーヌは台車の上の料理を二つ取った。

ユウトはフィレーヌの向かいに座り、フォークとナイフを手にする。その時、フィレーヌが首を傾げ言った。

「なぜ私の向かいに座られるのですか」



「え？ 逆に何でだよ」

「分かってないですね。男女が向かい合って座るなんて仲が悪いと言っているようなものです。私達は愛し合っているのですから、貴方は私の隣に座るべきでしょう」

「……愛し合ってる？ あ、ふーん、そうなんだ……」

ユウトはナイフで、皿の上の分厚い肉を裂いていく。

「あら、ユウトともあろう方が気付いていらっしやらなかったのですか。情けない」

フィレーヌは眉をひそめ、拗ねたように言う。

「はいはい。あ、明日の事はお前に任せるからな」

「あの四人の事ですか？」

「うん。よろしく」

「かしこまりました」

ユウトとフィレーヌは流れるように会話すると、そこからは料理係のメインディッシュについて語り明かしていた。

その頃、ラナ達は部屋の中にいた。金髪の少女ルツカと、赤茶の髪を持つシフォウは既にベッドの中で寝息をたてている。

リイシャはソファに深く座り込み、ボーっと天井を見上げていた。ラナは、部屋の端にある、大きな窓のそばに腰を下ろし、暗くなつた外を見つめている。そこには、食堂からと同じ景色が広がっていた。ラナはそのまま自分の腕へと視線を落とした。

奴隷時代につけられた傷や痣。見るだけで痛々しいその痕は、風呂に入った時に落ちた汚れと一緒に落ちてはくれなかった。辛い過去の象徴であるこの傷は、これから見るたびにラナに奴隷時代を思い出させるのだろう。いつか笑い話になるなんて有り得ない。笑えない過去。たとえ傷や痣が消えたとしても、ラナ達には忘れる事なんか出来ない。

そう思った直後、枷が外れたようにラナの涙腺は崩壊していく。声を枯らしていく。それでも尚、涙を流す。

ユウトがいない間、彼女達は何を話していたのだろうか。

### 第三話 過去は人を強くするのだろうか（後書き）

生存確認中……生存確認中……

あ、ダメだこりゃ。

おつかれさんした〜

……なにがしたかったんだっけ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4835w/>

---

アボリシオネスト～abolisionist～

2011年9月14日03時27分発行